研究報告

文のすがた
―名詞句の時間的限定から―

樋野幸男

富山大学人文科学研究第80号抜刷
２０２４年２月

研究報告

文のすがた
―名詞句の時間的限定から―

樋野幸男

0．はじめに

日本語の文がどのような特質を有するのか、準体構造および連体修飾構造の概略を説明することからはじめて、新たな理解へと接近する。

本稿の究極のテーマは《文が何を指示するか》あるいは《文があらわすもの》を考察することだ。たしかな結論をしめすことはむずかしいが、その問題意識を共有することをめざす。

まず、術語を確認しておこう。『言語学大辞典』「指示」の項目から要点を引用すると、

> 指示（しじ）英 reference ……われわれは言語記号の意味作用(signification)を利用して，現実の，パロールの場面にある具体的な物を指示する(refer to)．言語記号と言語外の対象との，このような結びつきを「指示（あるいは指向）」といい，この場合，言語記号は指示的意味(referential meaning)をもつといわれる．（亀井孝（他）編『言語学大辞典』第6巻術語編、1996年、三省堂刊）

とある。単純な名詞では、日本語［ヤマ］は下にしめすような個物を指示する。名詞以外でも、動詞・形容詞などは具体的な内容に言及しないが、抽象的な概念を指示する。具体的・抽象的な相違はあるが、文中の個々の単語の指示内容は比較的明瞭だが、文全体の指示内容となると、新たに考える必要がある。ここから本稿の考察がはじまる。

［ヤマ］→「山」

1．文がうみだされる

さて、文とは何か（何を指示するか）を考える手順として、まず、文がどのようにうみだされるか簡単におさらいしてみよう。

まず、『言語学大辞典』「文（ぶん）［文の定義］」は、

> 文の原型は，判断，それも賓述(predication)判断を表わす命題(proposition)の表出にある．

……，普通は，ある実体についてその属性を述べること，すなわち賓述を表出する．

というが、〈命題〉は所与のものではない。どのようにたてられるだろうか。

ところで、人間の行為としておこなわれる言語は話し手がうみだすものだ。話し手は言語として表現する対象として伝達を必要とする現象を選定する。〈現象〉とよぶが、それは具体的／抽象的、現実的／非現実的と何でもかまわない。言語化される以前の素材をそうよぶことにする。具体的かつ現実的な現象であれば、それは写真のように様々な要素がひしめきあって存在する。その要素をひとつひとつ全部をひろいだすことは不可能なのがふつうであるが、話し手はその中から彼らの意思によって任意に抽出して事象[1)]を確立する。すると、言語学大辞典によれば、事象が言語の形式をとったとき文が形成されるといえる。

話し手　⇒　現象から事象を抽出する

喧嘩する子ども：太郎（左）と次郎（右）

イラストを見てみよう。イラストではなく実際の様子をしめすのが適切だが、イラストで代用する。（イラストも実際の様子の中から抽出された要素を視覚化したものであり、写真がより実際に近い。）現象を観察すると、〔人物〕太郎・次郎、〔行動〕喧嘩をする、〔トキ〕過去（トキはイラストに反映しない。）である。つぎに、話し手が事象を抽出・確立する。文にすると、「太郎と次郎が喧嘩した。」となる。現象をもっとよく観察すると、いろいろなことを文につけ加えることができるが、話し手が必要なだけ抽出して文をつくる。

２．文から節へ、連体修飾構造をつくる

本節および次節では、文の資格をもつ準体節が形成する準体構造について、その特質を追究することから文の問題に接近することを試みる。まず、連体修飾構造をみてから準体構造にすすんでゆく。前者も文の資格をもつ連体修飾節が被修飾名詞を修飾することで形成される。

1）本稿では、言語化されない段階を〈事象〉とよび、言語化をうけた事象を〈命題〉とよぶ。命題はそのままで〈文〉にもなれる。

(1) 太郎は、［きのう東京で ϕ[2] 買ってきた］みやげを花子にあげた。

(1) の［きのう東京で ϕ 買ってきた］は連体修飾節で文の資格をもち、被修飾名詞「みやげ」を修飾する機能をはたす。この文では「みやげ」が意味論的に述語動詞「あげる」の補語（目的語）の関係にあるが、通常の連体修飾では顕在しない[3]。

3．準体節が準体構造をうみだす

つぎに、ほぼ同一の構成要素で形成された準体構造[4]をとりあげる。準体は被修飾名詞を不要とする構造で、かつ、それは潜在もしない。そのメカニズムは樋野(2021)[5]で述べたから、そちらを参照してほしい。(2)の文の［ ］がそれである。

(2) 太郎は、［きのう東京で ϕ 買ってきたノ］を花子にあげた。

準体助詞ノが準体節の標識となって準体節末尾に付加されるが、節であることに疑いの余地はない。［きのう東京で ϕ 買ってきたノ］は属性準体で、事象準体と異なり、個物（いわゆるモノ）を指示する[6]。連体修飾構造が〈連体修飾節＋被修飾名詞〉の構造で個物を指示するのに対して、こちらは〈準体節＋ノ[7]〉だけの構造で個物を指示する。肝要な点は、連体修飾構造が〈ドノヨウナ＋ナニカ〉の形で前項も後項も構成要素となるのに対して、準体構造は〈ドノヨウナ（ノ）〉の形で完成する構造が本来で、〈ドノヨウダ〉を体言化する表現形式である。それは(2)の場合、連体修飾構造と対比すれば、後項（ナニカ）に相当する部分が発話の趣旨ではなく、前項（ドノヨウナ）［きのう東京で買ってきた］が焦点となっているからである。準体は〈ドノヨウダ〉を趣旨とした表現形式で、つまり、「太郎は、ソレを花子にあげた。」のソレに相当する体言を形成する。準体構造は節（＜文）が文（＝主節）に埋め込まれてうまれる。

2）「ϕ」は、潜在する構成要素が顕在しないことを示す記号として用いる。「ϕ＝みやげ（を）」を統語論的に補充できる。

3）寺村(1975-78)は、このような連体修飾節に顕在せず、被修飾名詞としてあらわれる要素を「底（の名詞）」とよび、それが「修飾部」から「転出」したと考えるが、本稿の筆者は、顕在しないが潜在すると考える。その点が寺村の理解と異なる。

4）以下、ただ〈準体〉とよぶことがある。

5）以下、〈前稿〉とよぶ。

6）〈属性準体／事象準体〉は筆者の術語で、いわゆる〈モノ準体／コト準体〉に等しい。主節の述語動詞「あげる」が準体節に個物を要求することで準体構造がモノを指示する。

7）〈ノ〉は、上述のとおり準体助詞であって名詞ではない。ただし、形式名詞と理解する説もあるが、首肯しがたい。本稿では、片仮名で標示する。

4．準体構造から名詞句の時間的限定をみいだす

前節で述べた準体構造のうち、特殊な《有基底属性準体構造》を概観して、そこから《名詞句の時間的限定》という考え方を紹介する[8)]。

(2)の文の準体節に基底名詞句[9)]「指輪」を挿入した(3)の文について考えてみよう。

(3) 太郎は、［きのう東京で指輪を買ってきたノ］を花子にあげた。[10)]

さて、プレゼントしたのは指輪だが、どんな指輪なのかを準体節[11)]が述べている。〈東京の宝石店の店頭に展示してあった指輪を買ってきた〉と仮定しよう。買ってきたのは昨日で、あげたのは今日だ。同一の指輪に時間的移行による異同が生じている。従来の言語研究においてはこの相違、つまり、同一である個物の時間的異同を問題にしてこなかった。しかし、テンス・アスペクトにかかわる時間的異同を分析の基準に導入しないでは解決できないのが当該の構文である。ふりかえると、前稿における分析の過程で、準体節の成分である基底名詞句の指示対象（展示してあった〔昨日の指輪〕）とその準体構造の指示する個物[12)]（昨日東京で買ってきた〔今日の指輪〕）とのあいだに時間的乖離が存する場合、それらを峻別することで問題が解決することを経験した。

つぎに、(4)の文で述語動詞「投げる／打つ」と基底名詞句「ボール」との時間の関係を確認しよう[13)]。

(4) 大谷は、［ピッチャーがボールを投げたノ］を打った。（坪本(2003)より）

(4_0) 大谷は、［ピッチャーが ϕ 投げたノ］を打った。

8）有基底属性準体構造について、前稿で検討したので、詳細はそちらを参照してほしい。《基底名詞句》という概念を規定することから、《名詞句の時間的限定》が導かれる。この名称を用いていないが、その主旨について論述した。

9）「ϕ」に代入可能な名詞句を〈基底名詞句〉とよぶ。

10）この文は作例。この型の文は文脈から抜きだすとやや奇異に感じられるかもしれないが、検索すれば容易に見つかる用例である。

11）黒田(1999)を唱導者とする《主部内在関係節》という見解では、筆者のいう準体節を関係節とみなすが、筆者はこの考えに同意できない。

12）準体の指示する指輪は昨日の時点で成立するが、実際は述語動詞の叙述時間に発現する。主節は今日のデキゴトを述べる。

13）前稿で引用した文の主語を変更した（イチロー ⇒ 大谷）。また、図の表示を簡素化した。さらに、「投げる前」終端の位置を変更した。

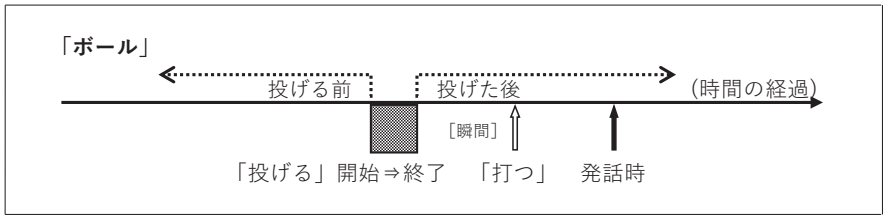

図１.「ボール」と述語動詞の動作の継起の関係

図１をみると、当該のボールがその状況を時間的に推移させる。つまり、述語動詞「投げる」の補語となる基底名詞句「ボール」は、〈投球の途中[14]〉の時間に限定される。一方、「打つ」対象は、それと異なる準体構造の指示する〈投球の後〉の時間に限定されたボールだ[15]。

(4$_{-0}$)の文は基底名詞句の顕在しない準体構文だが、ドノヨウナ（個物）だけを叙述し、ボールであることについて述べていない。(4)の文は、準体節がボールを「投げる」動作を叙述し、さらに、主節が準体構造の指示する〈投球の後〉のボールを「打つ」瞬間的動作を叙述する。

名詞句は文が叙述する限定的時間で作動するから、準体節に顕在する「ボール」も準体節の叙述する時間に限定された名詞句である。

つぎに、同じく(3)の文についても確認してみよう。

(3) 太郎は、［きのう東京で指輪を買ってきたノ］を花子にあげた。[16]（再掲）

図２から、主節の述語動詞「あげる」が叙述する動作の時間に発現するのは、準体構造が指示する〔今日の指輪〕で、準体節に顕現する「指輪」は〔昨日の指輪〕だ。「あげる」は瞬間動詞だから、主節の叙述時間は矢印の先端が指定する瞬間である。一方、準体節［きのう東京で指輪を買ってきた］の叙述時間は、図の長方形の範囲だ。基底名詞句「指輪」もその時間に限定され、準体節は、「買う」動作から帰着するまでの時間を叙述する。

14）〈投球の途中〉とは「投げる」開始から終了までの時間帯をいう。

15）基底名詞句「ボール」は準体節の成分であるため準体構造の内部に包摂される。よって、統語構造から、主節の述語動詞「打つ」が作用する対象は準体構造であり、その内部の成分には作用しない。主部内在関係節とみなす見解では、それに作用すると考える点に大きな矛盾が生じる。

16）「買ってくる」は、購入して帰着するまでが一体の動作で、瞬間的には成立しない継続動詞と考える。

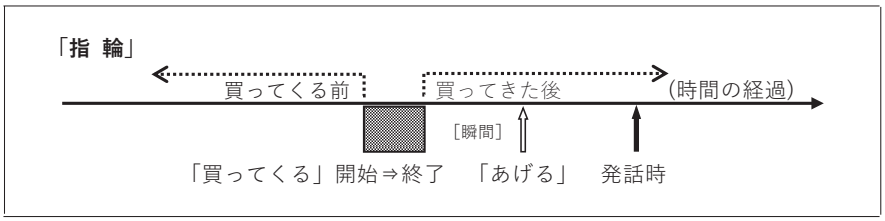

図２．「指輪」と述語動詞の動作の継起の関係

二つの用例から知られるように、名詞句に時間的な限定が生じることを前提とすると、用例の理解が円滑にすすむ。上述の要点を整理すると、《文は述語動詞の運動が進行する時間に限定してデキゴトを叙述する。それに関与する名詞句もその時間に限定される。》その反面、その運動の前後の時間について文は何も叙述しない。

ここで新たな理解を提出する。文の中では、名詞句にも時間的制約があり、その指示対象は文の叙述時間の推移によって変容する。《名詞句の時間的限定》とは、名詞句がその文の叙述時間に限定されて作動すること。

５．単文の名詞句も時間的限定をうける

前節において、準体構造を分析する過程から名詞句の時間的限定という事実を導出した。本節では、その事実を単文においてたしかめてみる。単文でも生じることは自明だが、論述の順序としてふれておく。

まず、(5)の文をとりあげよう。テンスを過去とする単純な文である。

(5) 太郎が結婚した。[17]

(5)の「太郎」はこの文の叙述時間に限定される。つまり、文の叙述対象である「太郎」は、述語動詞「結婚する」の動作が進行する図３の長方形の時間に限定され、その時間から外れた「太郎」は叙述されない。しかし、聞き手は文の受容が完結すると、その叙述内容から、「太郎」

17)「結婚する」は意味にはばがある。婚姻届を提出することなら法律上の婚姻で、その瞬間に結婚が成立するから瞬間動詞とみなせるが、結婚式を挙げることなら時間を要する。前者の場合も、図３の長方形の時間が瞬間になるが、論述に影響はない。なお、『新明解国語辞典第七版』「結婚」の項目は「(正式の)夫婦関係を結ぶこと。」とあり、「結婚する」は瞬間動詞と考えるのがふつうのようだ。

が新たな境遇に移行することを推知する。結婚した後の「太郎」だ[18]。

整理して示すと、〈結婚の前〉〈結婚する[19]〉〈結婚の後〉と三つの時間に区分できる。文は〈結婚する〉の時間を叙述する。

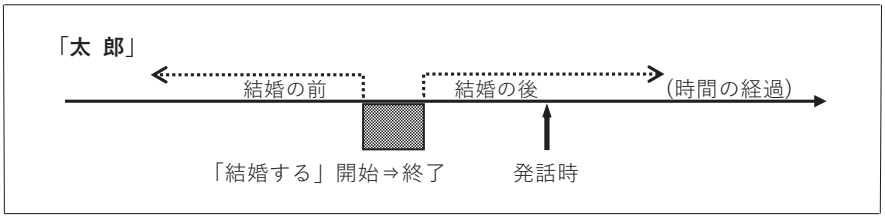

図３．「太郎」の時間的限定と述語動詞の動作の関係

文の叙述時間の開始（時刻）から終了（時刻）までが、述語動詞の作動する時間であり、文中の名詞句もその時間に限定して指示機能をはたす。よって、単文においても名詞句の時間的限定が生ずることは否定できない。

６．文があらわすものを考える

文にある名詞句は時間的に切りとられる。一方、文から独立した名詞句は、時間的な制約をうけない。文中の「太郎」は拘束されるが、文から抜け出した「太郎」は自由だ。なぜなら、述語動詞が主語や補語となる名詞句を支配し、それを（述語動詞の作動する）文の叙述時間に限定するからだ。

さて、準体構造が新たな局面の個物を指示したように[20]、文が完結すると、その構成要素である名詞句も新たな時間的局面に移行する。文はその叙述内容からナニカを聞き手に感じとらせる。これは仮説だが、実際はどうだろうか。

実験で確かめる前に、問題の所在。いわく、動詞述語をとる文には叙述の対象となる主体がある[21]。文はその主体に生じる種々の状況を叙述するが、文は（主体の）状況を述べるのが本分なのか、主体（の状況）を述べるのが本分なのか、理論的に判定することが困難である。そ

18）「太郎」の進展（移行）は、すでに述べた準体構造を有する構文と原理が通底する。既述の二つの用例においても、準体節の生成する準体構造が指示する個物は、その叙述時間の終了後に生じるもので、〔投球後のボール〕や〔今日の指輪〕にあたる。なお、このような進展（移行）は、述語との格関係が異なっても、用例を検討すれば、どの格でも共通に生じることが確認できる。

19）図３の長方形の時間が〈結婚する〉にあたる。その時間の両端は、論理的に〈－前〉の終端と〈－後〉の始端とに重なる。

20）準体構造の局面とそれを生成する準体節が叙述するデキゴトの時間（≒局面）とは異なる。

21）通常は主語の位置をしめる。

れでは、実際に聞き手は文をどのように受容するだろうか。

実験にとりかかろう。最初に既出の(5)「太郎が結婚した。」を刺激文として実施する。以下、節を改めて記述する。

７．文の叙述内容が規定する情景をはかる（１）

すぐさま目的を述べれば、被験者が(5)の文の主語である「太郎」の情景をどのように推知（想起）するかを検証する。その情景は文の叙述内容が規定すると考える。

実験について説明する。被験者に対して刺激文を聞かせ、記憶について質問する。下記のような質問票を用意した。（質問の部分だけ掲載。）

実施日：2023年7月20日、下記の授業開始後、通常の教室にて
被験者：勤務校で開講する授業「日本語文法研究法」の受講生（大学２～４年）
留学生２人を除いた55人（日本語母語話者）
備　考：事前に関連する情報を与えていないが、アスペクトの継続相／完成相に関する授業の後におこなった。質問票と回答欄は、スマートフォンを使用させ、インターネット上に用意した。実験は筆者が進行し、刺激文も読み上げた。

①質問票の注意事項を読ませる。質問は見せない。②実験者が刺激文「太郎が結婚した。」を１回だけ口頭で読み上げる。刺激文は音声のみを聞かせ、視覚的に文を提示しない。③質問を見せ、回答させる。

口頭で簡単な文を読み上げます。それを聞いて答えてください。
（口頭で読み上げ、１回のみ。「太郎が結婚した。」説明のため記載。）

（ア）文を聞いた後、「太郎」のことが脳裏に残りましたか。〈はい〉か〈いいえ〉で答えてください。
上の質問で〈はい〉と答えた人だけ答えてください。〈いいえ〉の人は（ア）で終了です。
（イ）その「太郎」は、つぎのどれに該当しますか。
① 結婚の前　② 結婚の後　③ どちらとも決まらない
以上で質問は終わりです。ありがとうございました。

上記の質問票を用いた実験をおこなった。その結果をしめす。

（ア）　〈はい〉と答えた　　：４０人

　　〈いいえ〉と答えた　　：１５人　（←分析から除外）

（イ）　①〈結婚の前〉と答えた　：　４人

　　②〈結婚の後〉と答えた　：２９人

　　③〈どちらとも決まらない〉と答えた：　７人

８．文の叙述内容から記憶をへて情景をいだく

さて、結果を分析してみよう。はじめに、「太郎」のことが脳裏に残ったかの質問に〈いいえ〉と答えた15人は、記憶が形成されなかったと考えて分析から除外する。「脳裏に残る」は「記憶に残る」とほぼ等価とする。なお、「「太郎」のこと」と表現したのは、単なる人物名「太郎」ではなく、後述のように情景の中の存在を意図したからである。

〔被験者は「太郎」を既知の人物と想定する〕　実験者が要請することなく、「太郎」を存在かつ既知の人物と想定して、会話の相手が発話した文として、被験者は刺激文を受容する。もちろん、「太郎」が不在かつ未知のとき、実験は成立しない。実験における被験者は、ふつう実験者の利便に暗黙裡に配慮する習性をもつ。

〔刺激文の記憶（＞情景）から本稿の課題に接近する〕　本稿は、言語を対象とした研究だが、文のあり方を考察するため、被験者が文を聞いた結果どのような情景を形成するのかを追究する[22]。その情景は言語である文によるものだから、まさに〈文があらわすもの〉と考えられるからだ。言語表現の意味の理解の状況を計測することはむずかしく、形成された情景から推測することが解決につながる。情報伝達という観点から、その情景は、むしろ文の伝達による本質的な成果とみるべきだろう。

〔前提として発話時に存在する「太郎」を排除する〕　実験では被験者に文を１回だけ聞かせて、紙面に記載した文を見せない方法をとった。その趣旨は、被験者に、文から得られる情報

22）ここでの〈情景〉とは、視覚的な残像と理解されるが、必ずしもそうとのみ限定できない。そこには聴覚的な言語（単語など）も混在・混合すると予想される。また、〈いいえ〉と答えた15人の中には、文のまま記憶され、（記憶＞）情景が形成されなかった人もあろう。ただし、後述のように（注24後段）、文の記憶でも〈はい〉と回答した人もあろう。

を記憶させ、さらに、その記憶を視覚的[23]で時間的に推移する情景[24]に変換させることだ[25]。この方法、つまり、情景を問えば、そこに（閉じ）込められた「太郎」を知ることができよう。一方、文そのものを問う場合、文の叙述内容に（閉じ）込められた「太郎」と異なる、刺激文の前提として発話時に存在する「太郎」を推知（想起）する危惧がある。如上の「太郎」は、文のもつ情報と照合すれば、一義的に〈結婚の後〉と理論的に決定されるが、本稿の目的である聞き手が文からうけとる「太郎」の情景のいかんを知るには、そのような「太郎」を排除しなければならない。

９．文の叙述内容が規定する情景をはかる（２）

まず、分析にさきだって本稿の課題に不可欠な重大な論拠となる考えを紹介する。動詞述語文のアスペクトに関する発言である。つぎのとおり。

高橋(1986)によれば、「ウゴキをまるごとのすがたでとらえるか、持続のなかでとらえるかが現代日本語動詞のアスペクトの対立の基本であることを指摘した(p.9)」のは、奥田(1977)である。奥田は動詞完成相について、

> suruというアスペクチュアルなかたちが表現するアスペクチュアルな意味は，基本的には，《分割をゆるさないglobalityのなかに動作をさしだす》ことである。(p.217)

と主張した。筆者も動詞完成相の《動作をまるごとさしだす》という意味にもとづいて考察を進める。本稿の前半で述べた名詞句の時間的限定も、このアスペクト論が基盤となっている。

さて、刺激文「太郎が結婚した。」は動詞完成相・過去の文。前掲の実験結果を解釈すると、つぎのようになる。

①〈結婚の前〉と答えた　⇒　文の叙述時間より以前〔未婚の太郎〕

②〈結婚の後〉と答えた　⇒　文の叙述時間より以降〔既婚の太郎〕

③〈どちらとも決まらない〉と答えた　⇒　文の叙述時間〔結婚する太郎〕

筆者がしばしば言及する文の叙述時間（図３を参照せよ。）が、やはり肝腎だ。ここで〈結婚する〉は一体的な運動で分割できないことが前提となる。①「太郎」の情景が〈結婚の前〉

23）視覚的といっても、文の構成要素である単語から完全に逃れることはできない、固有名詞がそうである。「非言語的」と換言できる。

24）情景は、文と異なり、発話時のような時間的基点をもたない。ただし、被験者の記憶に過去／非過去（≒未来）の対立が存すると考える。（写真のような）瞬間的な情景ではなく、（動画のような）推移する情景である。しかし、実際は単純な文であるため、情景を形成せず、文そのものを記憶する被験者が多いかもしれない。その場合も、彼らは質問に対する回答の段階で、要求された（記憶＞）情景の「太郎」を無意識に形成して回答するものと考えられる。

25）（動画のような）推移する情景を期待したところ、そのような被験者は稀有だった。しかし、そのことが本稿の主張につながる。

であることは、〔未婚の太郎〕を被験者が文から推知（想起）したことを意味する。〔未婚の－〕は文の叙述時間に属さない。②おなじく〈結婚の後〉は〔既婚の太郎〕を意味する。こちらも文の叙述時間に属さない。一方、③〈どちらとも決まらない〉は、両者の中間〔結婚する太郎〕を推知した、あるいは、情景が曖昧で判断できなかったことを意味する。③のうち判断不能の被験者（人数：不明）を除外すると、③は〔未婚から既婚へ〕移行する文の叙述時間に属する「太郎」を推知（想起）したことになる。反対に、①および②は文の叙述時間を除いた以前／以降の時間に属する「太郎」である。ただし、どの情景も〈結婚する〉という叙述内容を帯びている[26]。

多数をしめた回答は、②〈結婚の後〉で72.5％（29／40）である。じつは、実験前の筆者は③〈どちらとも決まらない〉のうち〔結婚する太郎〕を予想した。その根拠は、上述のアスペクト論によれば、文の外見的構造からそうとしか考えられなかったのだ[27]。

さて、そうすると意外な疑問が浮かんでくる。すでに指摘した、①および②の「太郎」が文の叙述時間に属さないことだ。文の主語「太郎」は叙述時間に属するから、それと異なる「太郎」である。そこで、別の刺激文を用意して、あらためて実験してみた。つぎのとおり。

実施日：2023年9月6日・12日（前半18人）／10月5日（後半17人）、勤務校にて
被験者：勤務校の事務職員および学生（２～４年）35人（日本語母語話者）
事前の知見を排除するため、最初の実験の被験者を含まない。
備　考：関連する情報を与えない。事務室あるいは教室・学生控室において対面で実施。
紙の質問票を用いた。筆者が進行し、刺激文も読み上げた。

①質問票の注意事項（上部に記載して、質問が書かれた下部は折り曲げて見せない。）を読ませる。②実験者が刺激文「あした太郎が富士山に登る。」を１回だけ口頭で読み上げる。刺激文は音声のみを聞かせ、視覚的に文を提示しない。③質問票の下部を見せ、回答させる[28]。

26）ただし、被験者は質問に対する回答として理性的に真実の記憶から離れて回答した可能性も考えられる。そうだとしても、論理的な判断からそれぞれの回答が選択されたことは、〈文があらわすもの〉を考える有益な材料となる。

27）奥田のアスペクト論による予想と異なる実験結果から、後述するように、夢想だにしなかった文のしくみが見えてきた。なお、奥田の論に瑕疵はなく、有効だと考える。

28）後半の実験では（イ）の選択肢を変更した。【】のとおり。その理由は、〈登る途中〉を〈どちらとも決められない〉で回答させようと考えたが、数値の内訳が不明となるため〈登る途中〉と〈その他〉とに分割した。ただし、いずれも回答はゼロだった。

正答／誤答はありません。深く考えず、直感で答えてください。

これから簡単な文を（１回）読み上げます。それを聞いて答えてください。

（口頭で読み上げ、１回のみ。「あした太郎が富士山に登る。」説明のため記載。）

（ア）いま、「太郎」のことが記憶に残っていますか。〈はい〉か〈いいえ〉で答えてください。

上の質問で〈はい〉と答えた人だけ答えてください。〈いいえ〉の人は（ア）で終了です。

（イ）その「太郎」は、つぎのどれに該当しますか。

① 登る前　② 登った後　③ どちらとも決められない

【① 登る前　② 登る途中　③ 登った後　④ その他　】

以上で質問は終わりです。ありがとうございました。

上記の質問票を用いた実験をおこなった。その結果をしめす。

（ア）　〈はい〉と答えた　：３３人

〈いいえ〉と答えた　：　２人　（←分析から除外）

（イ）前半①〈登る前〉と答えた　：１６人

前半②〈登った後〉と答えた　：　０人

前半③〈どちらとも決められない〉と答えた：　０人

（イ）後半①〈登る前〉と答えた　：１７人

後半②〈登る途中〉と答えた　：　０人

後半③〈登った後〉と答えた　：　０人

後半④〈その他〉と答えた　：　０人

最初の実験と同様に結果を分析する。刺激文「あした太郎が富士山に登る。」は動詞完成相・非過去の文[29]。実験結果を解釈すると、つぎのようになる。

前半①・後半①〈登る前〉と答えた　⇒　文の叙述時間より以前〔未登山の太郎〕

前半②・後半③〈登った後〉と答えた　⇒　文の叙述時間より以降〔既登山の太郎〕

前半③〈どちらとも決められない〉後半②〈登る途中〉と答えた

⇒　文の叙述時間〔登山する太郎〕

文の叙述時間に注目する。〈富士山に登る〉も一体的な運動で分割できないとする。「太郎」の情景が、〈登る前〉では〔未登山の太郎〕を文から推知（想起）した。〔未登山の－〕は文の

29）「あした」を加えたのは、文が未来のデキゴトを表わすことを明示するため。

叙述時間に属さない。おなじく〈登った後〉では〔既登山の太郎〕だ。やはり文の叙述時間に属さない。一方、〈登る途中[30]〉では、両者の中間〔登山する太郎〕を推知（想起）した。まとめると、〔未登山の－〕〔既登山の－〕は文の叙述時間を除いた以前／以降の時間に属する「太郎」で、文の叙述時間に属するのは〔登山する太郎〕だ。ただし、どの情景も〈富士山に登る〉という叙述内容を帯びている。

さて、回答をみると〈登る前〉以外はゼロ。理由は現段階で不明だが、現実的に〈登る前〉の「太郎」を推知（想起）する構造のようだ。

二つの実験をまとめよう。最初の実験では〈結婚の後〉が優位であるのに対して、第二の実験では〈登る前〉が優位である。行為の前／後が逆の状況を呈するが、前者が過去のデキゴト、後者が未来のデキゴトであることを考慮すると、何らかの合理性が認められるかもしれない。図４は、二つの実験の結果を、情景を形成する時間的位置（人形の標識）を明示して図式化する[31]。ただし、人形の位置は、理論上、どちらも発話時の直前／直後まで広がりをもつ。

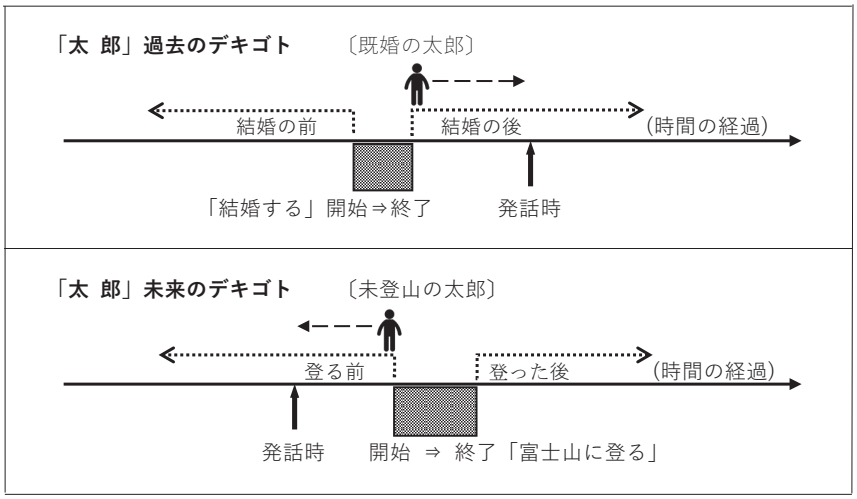

図４．文の叙述時間と「太郎」の情景の時間的位置の関係

30）前半③〈どちらとも決められない〉に含まれる〈登る途中〉をあわせる。判断不能の被験者を除外するが、全体の人数はゼロ。

31）最初の実験は、優位な回答を標示する。じつは、第二の実験の後半 17 人には、本来の実験の終了後に時間をあけて最初の実験も実施した。その結果は全員〈結婚の後〉と回答した。このことから、最初の実験における回答の分散は、アスペクトの授業を受講した影響があったものと考える。

１０．実験から構造をよみとる

これまでに実験の結果を確認してわかったのは、「太郎」の情景が生起する時間的位置が、叙述されるデキゴトの時間ではなく、その外縁の時間に極端に偏向した分布をしめすことである。そこで筆者は、後述する新たな文の理解を提出する。

まず、実験の結果にしたがって、《情景は叙述されるデキゴトの時間ではなく、その外縁の時間に形成される》という仮説をたて、それに基づいて考察する。

さて、被験者が情景として推知（想起）したものは何なのか。それは文の主語ではない、叙述内容にも含まれない。なぜなら、その情景は文の叙述時間に属さないから。名詞句の時間的限定を考えると、文の叙述時間の外縁に、図４の過去のデキゴトでは、〔既婚の太郎〕が形成され、図４の未来のデキゴトでは、〔未登山の太郎〕が形成される。それらが情景だった。ここで気づくのは、情景が従来の文の理解において見過ごされた構成要素であったこと[32]。そこで、文をしばらく文を形成する前段階の〈命題〉と仮定してみよう[33]。たとえば、文「太郎が結婚した。」を形成する命題［太郎が結婚した］に還元するのだ。ただし、命題の成分である主語「太郎」が名詞句の時間的限定をうけることは同じだ。すると、情景と命題とのあいだに、《情景の「太郎」が命題の叙述内容を属性にもつ》という関係が見えてくる。換言すると、情景と命題とが合同で文を構成するのだ。（逆に、文は情景と命題とに分解できる。）情景の「太郎」と命題の主語「太郎」とは時間的限定が異なり、等価でない点が重要だ。

１１．文が情報の有用性をめざす

ここで、鍵となる情景の意味を考えるため、つぎのことを述べておこう。

それは、文の発話が何のために行われるのかという点である。たとえば、文「太郎が結婚した。」を発話することは、その含意する情報を伝達するためだが、この情報は、文の中核となる「太郎」の存在によって成立する。発話の前、聞き手は〔未婚の太郎〕が既知であり、〔既婚の太郎〕が未知である。現実には未知の情報が伝達されることが有意義だ。発話が終わって、聞き手は何をうけとるだろうか、また、聞き手の脳裏にどのような情景が残るだろうか。

まず、述語動詞による運動がイメージされる。その内容は、(a)結婚式会場の風景かもしれない。あるいは、(b)婚姻届を役所に提出する場面かもしれない。さらには、(c)もっと抽象的な婚姻関係が成立することかもしれない。いずれも、そこに「太郎」の情景が存在する。〔未婚の太郎〕でなく、〔既婚の太郎〕だ。

32）指摘すべきは、疑う余地なく情景が文からうけとった情報であることだ。

33）筆者はつぎのような関係を考える。

現象 → 事象〔以上、非言語〕→〔以下、言語〕命題 → 文（あるいは節）

もう二つ。文「太郎が橋を渡った。」は、川にかかった橋を渡る行為だ。その意味は、こちら側から橋を渡りはじめてむこう側に到達することだが、それだけでなく、その後〔既渡橋の太郎〕が生起する。橋を渡る行為も重要だが、〔既渡橋の太郎〕にも意識がゆくし、そちらが発話の目的かもしれない。以上、行為の後。反対に行為の前では、文「(今から) 太郎が橋を渡る。」こちらは未来のデキゴトを述べる文だが、このとき〔未渡橋の太郎〕に情報の価値がある。なぜなら、「太郎」の予定をあらわすから。

三つの文から、行為それ自体より過去の行為によって生起した人物（の状況）、および、同じく未来の行為によって生起する人物（の状況）が、情報の有用性が高いことがわかる。言語は、話し手と聞き手との相互の情報のやりとりが主たる目的だから、情報の有用性が発生する運用が指向されるのだ。けっきょく、過去の文で生起した人物（の状況）、および、未来の文で生起する人物（の状況）をつたえることが、文の発話の目的だと想定するのが現実的ではないか[34]。これが情景の正体だ。

１２．情景をあらためて規定する

前々節では、《情景が命題の叙述内容を属性にもつ》ことを論述した。本節では、情景をあらためて規定しよう。考察の過程において、実験の被験者＝聞き手が文の記憶から主語にたつ名詞句をドノヨウニ受容するのか、それを〈情景〉とよんだが、それは主語名詞句の叙述時間の一方の外縁における姿だった。それは無意識裡に文の構造の深奥で基盤的な職能を担うものである。本稿では、それを〈文底〉とよぶ。すると、上述の規定は《文は、文底が命題の叙述内容を属性にもつ》となる。文底は、文の生成における、命題（の叙述内容）が付随・従属する、基底部に存する中核成分である。ただし、文の表にあらわれる命題の背後にあるため、意識にのぼることはまれだが、発話の目的というべき存在である。

ところで、言語は、意思疎通のため、話し手も聞き手もたがいに伝達の成立をめざす。母語話者ならば、しくみを知らずとも相手の意思をくみとれる。発話において、文底は話し手が決定するが、聞き手も状況からそれを推知して、共有する。文底とは、話し手が意識的に規定せずとも、その場で自然と形成されるものである。

１３．文の発話がおこなわれる

さきに、文が発話される条件を確認する。何が必要だろうか。三つの要素があげられる。まず、発話する主体である話し手だ。つぎに、発話しようという動機。何かデキゴト・コトガラについて伝えたいと感じること。さらに、最終的に発話する主体の意思である。そこではじめ

34）本稿では主語「太郎」の文をとりあげたから「人物」と表現したが、人物に限定されない。

て発話行為の条件がととのったといえる。

文「あした太郎が富士山に登る。」は、発話主体が〔未登山の太郎〕を認知し、それを伝えたいという動機が生じて、発話する意思をもつことが条件だ。そして、文底「太郎」の属性となる命題［あした太郎が富士山に登る］が形成される。文Sと命題(s)とは同形式をとるが、その構造は文底の属性たる命題(s)が文Sとして発現する。なお、話し手と聞き手とは、逆方向の過程をたどる。話し手は文底から（命題(s)＞）文Sを決定し、聞き手は文S（＞命題(s)）から文底を推知する。

１４．考察をふりかえる

本稿は、《文が何を指示するか》を探究してきた。たどりついたのは、《文は、デキゴトを叙述することで、文底をつたえる》という事実だ。文底とは、文の叙述時間の外縁に位置する（おもに）主語名詞句の姿（図４の人形）である。それを《文があらわすもの》だと感じるのではないか。余計だが、〈文底〉は実験の被験者＝聞き手の側からの命名で、話し手の側からは文を発話する動機が肝腎だから、〈文モメント〉（momentは動機の意。）とでもよぶのがふさわしい。

『言語学大辞典』「文（ぶん）［文の形態］」は、イェスペルセンを引用して述べる。

> 文は，ネクサスによる語の結合である．ジャンクションによる結合は，部分的な素材の表現にすぎないが，ネクサスによる文は，あるまとまった内容を伝える．少なくとも，ジャンクションの結合のような中途半端なものでなく，何となく落ちつく感じがするのである．このまとまった内容とか，何となく落ちつく感じとは何なのであろうか．（下線は筆者。）

筆者は、この疑問につぎのように答える。ネクサスとジャンクションとの比較において、伝達される情報に差異はないが、ネクサスはその結合の内部でその情報を整理し、有用なものへと構成する、つまり、文底（文モメント）を形成して、それと命題との関係を構築して提示するのだ。文はただ情報を投げだすわけでなく、自動制御が作動して（文底が形成されて）受容者の安堵につながると。念のため、ひとこと。文はデキゴトを述べるだけでなく、それにまつわる人やモノをつたえる。

本稿では、《文があらわすもの》を考えてきた。この問題の発端は、準体構造を生成する準体節が文に組み込まれる機構を解明することだった。詳細は省くが、準体節に対する準体構造の指示内容と、命題に対する文底（文モメント）と、が相似的な関係にあるのではないかと予想する。さて、筆者の現在地が正しいとすれば、その支柱となったのは《名詞句の時間的限定[35)]》という事実であった。再言となるが、それは奥田のアスペクト論に由来することを言明する。

35）〈名詞句の時間的限定〉と名づけていないが、樋野 (2021) がこの理解を公表した。

１５．おわりに

まず、訂正がある。それは、文と命題との関係である。文を命題と文底（文モメント）に分離したため、「文の叙述…」と述べた箇所は、「命題の叙述…」と訂正すべきかもしれない。つぎに、本稿の文の理解を前提とすれば、日本語成立の時点から命題と文底（文モメント）とに分離していたのか、あとから分離したのか。日常の運用のなかで獲得した機構である可能性も否定できない。最後に、命題と文底（文モメント）とは同値なのか、等式「$\sqrt{3} = 1.732\cdots$」の左辺と右辺とが等しいような関係か。（平方根３（こちらが命題）は、数値1.732…（こちらが文底）をあらわす解析結果で、あるモノを異なる形で表現したような。）整理できないまま疑問がひろがってゆく。

本稿の主張は、主題のない単純な完成相動詞述語文を対象とする。

参考文献

寺村秀夫 (1975-78)「連体修飾のシンタクスと意味―その１～その４―」（『日本語・日本文化』４～７、『寺村秀夫論文集Ⅰ―日本語文法編―』（pp.157-320、1992 年、くろしお出版刊）による。）

奥田靖雄 (1977)「アスペクトの研究をめぐって―金田一的段階―」（宮城教育大学『国語国文』8、松本泰丈（編）『日本語研究の方法』（pp.203-220、1978 年、むぎ書房刊）による。）

高橋太郎 (1986)「動詞の動詞らしさについて」（『国文学解釈と鑑賞』51-1、pp.6-16）

黒田成幸 (1999)「主部内在関係節」（黒田成幸・中村 捷（編）『ことばの核と周縁―日本語と英語の間―』pp.27-103、くろしお出版刊）

坪本篤朗 (2003)「再び、主要部内在型関係節構文―「分離」と「統合」の間―」（『ことばと文化』6、pp.27-44、静岡県立大学英米文化研究室刊）

樋野幸男 (2016)「準体句をなす連体形を準体形とみれば―準体構造の本質をたずねて―」（『富山大学国語教育』41、pp.43-50）

――― (2020)「基底核を発動する連体修飾の幻影」（『富山大学人文学部叢書Ⅲ 人文知のカレイドスコープ』pp.2-14、桂書房（富山市）刊）

――― (2021)「基底名詞句ノ顕在スル準体構造の粗描」（『東海学園 言語・文学・文化』20、pp.85-94）